

込みに墨横線を一本を引く。(14)は残存部から頭部が鋭角の山形と思われる。切り込みの有無は確認できない。上端部は墨で塗りつぶされ、その下に墨横線が一本引かれる。下端は鋭く尖ると思われる。文字は梵字であろう。(15)は板塔婆の下端、(16)(17)は板塔婆の下端に近い部分であると思われる。(17)の「廬」は「虚」の可能性もある。最後の文字は、墨痕は明瞭であるが判読できない。

(18)~(20)は米などの穀物の荷札であろうか。(18)は上部が平らで、下部は折損している。(19)(20)は上部が平らで、下部は先細りになつている。(21)は枠の底板、(22)~(24)は折敷の断片と思われ、文字は木目と直交する方向に書かれている。

なお、釈読にあたつては奈良文化財研究所の渡辺晃宏氏、馬場基氏ほかのご教示を得た。

9 関係文献

男鹿市教育委員会『国指定史跡脇本城跡』(男鹿市文化財調査報告
二九、二〇〇五年)

(竹内弘和)

木簡データベースの画像の拡充

公開から六年余りになる奈良文化財研究所の木簡データベースは、当学会の協力による『木簡研究』誌掲載の全国出土の木簡のデータの掲載によって、文字通り日本木簡の総合的なデータベースとして広く利用されている(年四回更新。現在四〇二六二点の木簡を収録)。

このデータベースは木簡の基礎的な情報についてのテキストデータを主体としつつ、木簡の全体画像とのリンクもはかつてきた。これまで画像とのリンクは奈良(国立)文化財研究所が調査した木簡のうち、長屋王家木簡・二条大路木簡の優品から順に進めてきたが、このたび『平城宮木簡』一~六所収の木簡について、画像の公開を開始した。これにより、現在入手困難なものもあるこれらの報告書所収の木簡について、手軽に画像を閲覧できるようになった。

奈良文化財研究所では、このデータベースとは別に木簡画像データベース「木簡字典」を公開した(145頁参照)が、データの拡充にはなお時日を要することが予想されるので、従来の木簡データベースにおける木簡全体画像とのリンクへの期待は大きい。